

コウノトリ湿地ネットニュースレター

パタパタ

vol.

34

豊岡市城崎町今津1362
0796-20-8560
toshima8560@iris.eonet.ne.jp
<http://wac-s.net>



J0057 和歌山市にて 撮影 土橋進氏

- 1_コウノトリ繁殖地を全国に広げていこう
- 3_コウノトリ育む農法の仕組みを聞く(1)
- 7_ビオトープ 1年生
- 8_豊岡市日高町伊府地区でコウノトリの餌場づくりをしました
- 9_ハチゴロウの戸島湿地便り
- 11_高病原性鳥インフルエンザについて・編集後記

コウノリ繁殖地を全国に広げていこう

コウノリ湿地ネット 代表 佐竹 節夫



皆さま、あけましておめでとうございます。今年もよろしく申し上げます。

昨年に全国的な会として発足した日本コウノリの会は、新春早々に京丹後市久美浜町市場地区において人工巣塔の巣台を取り換える作業を行います。市民による国内繁殖地拡大作戦の第1弾というわけです。



写真1



写真2

〈写真1、2〉昨年末に完成した鉄製の巣台。直径 1.6m、豊岡でよく使っている円錐型です。電柱に上から被せます。

現在、但馬、野田、越前で放鳥され、もしくは野外繁殖によって日本の野外で暮らしている個体は100羽強、うち約半数が豊岡で留鳥化したり舞い戻ってはまた出たりという状態になっています。野外で暮らしている個体のほとんどが1カ所に定着せず飛び回っており、長期滞在地は、京都府京丹後市、福井県越前市、徳島県鳴門市、和歌山市、高知県大月市、奄美大島、徳之島など少数の地域です。しかも、長期滞在者は(韓国の2羽を含め)全員が独り者です。これでは、「全国に繁殖地を広げよう」と言っても、何もしなければ掛け声倒れに終わってしまうでしょう。野生復帰の取り組みとして、仕掛けることが必要です。

■ともかく各地で繁殖させること

なぜ、繁殖にこだわるか？ (とくに日本では)コウノリはペアを形成し繁殖を成功させると、その地に留まる習性があるからです。明治～昭和初期の記録には、「幼鳥は晩秋に南方に飛び去ったが、親鳥はその地を離れない」とあります。また、現在の豊岡・京丹後でのこれまでの10を超える繁殖ペアも、すべて遠方に移動せずに留まっています。つまり、繁殖さえすれば「飛去してしまう」との不安なく、環境づくり、まちづくりにも邁進できるのです。ですから、何としても繁殖にこぎつけることが大事です。そのためには、彼らに巣塔を用意してやらねばなりません。

でも、いつでも、どこにでも建てればいいというわけではありません。

■タイミングはいつ？

当然ながら、「巣塔を建てればコウノリが来る」わけではありません。コウノリが舞い降りてきた～餌生物はいるようだ～2羽目がやってきた。雌雄になった～長期滞在の気配あり…。通常なら、この辺りで巣塔の準備にかかります。餌生物の状況が不安定なら、ビオトープを造成することも重要です。問題は巣塔の設置場所。「最初は電柱に巣をかけるので、その近くに巣塔を建て、電柱の巣材を移し

てやる」ことが最善の策との考えもあります。でも、必ずしも電柱から始めるわけでもなく、巢塔の設置には巢塔の製作、電力会社との調整をはじめ、土地所有者、周辺水田の耕作者、地域住民などに理解を得なくてはならず、そう簡単には物事が運びません。市民活動では、「ここなら飛来状況や生物面、地元の人たちとの関係でも問題なし」の場所を選択し、むしろそこに誘導していくことだと思います。

今回の巢台設置場所を見てみましょう。周りはふゆみず田んぼになっており、ビオトープもつくられています。人工巢塔はすでに2基建っており、コウノトリが何度も止まっています。



写真3



写真4

〈写真3〉取り換え前の巢塔

〈写真4〉周囲は無農薬田。ビオトープの管理も徹底されています。

つまり、当会メンバーの野村重嘉さんたちが熱心に環境づくりをされており、美王恵次郎さんが毎日観察されている結果、こうした受け入れ準備が出来上がっているのです。そこに、巢台をきっちりとしたものに取り換え、万全を期そうとするのが今回の取り組みです。

相手は野生動物です。いくら万全を期すといっても、あくまで人間の判断なので、彼らが好んでくれるかは分かりません。要は、彼らに選択肢を多く与えてやろうというものです。だめなら、第2弾を用意すればいいのだから。

■ どこから手掛ける？

2005年の初放鳥から今日までで、何度も舞い降りる地はかなり固定化してきたように思います。そして、その中には線で結べるものもあります。豊岡を起点にして見ると、例えば日本海ルート。東方へ京丹後—与謝野—舞鶴—小浜—若狭—越前、西方へは鳥取—出雲—雲南へ。その他には南方ルートもありそうですが(綾部—琵琶湖の東西、和歌山・四国、兵庫の南部、上郡、西方へ倉敷周辺など)、まずは起点・豊岡の隣接であり、常に多数が降り立ち、ペア形成の可能性が高い京丹後で試みることにしたのです。

日本コウノトリの会としては、もっといろんな所、可能性のある場所に巢塔を建てたいと考えています。でも、今は発足したばかり。少しずつ・・・。

去年は、豊岡市百合地、出石町袴狭で、京丹后市久美浜町、網野町で、また鳴門市でも産卵まで進みながら繁殖には至りませんでした。その原因は、同種間闘争、経験不足(?)による無精卵、巢の立地条件などです。

野生動物の行動だから、観察だけ行って手出しをしてはいけない、との考えもあるやに聞きます。とんでもない。性成熟年齢に達している個体(これまでの実績からオスは1歳以上、メスは3歳以上とした)がオス、メスともに40羽近くもいながら、単独で全国を飛び回っている現実。人間が一度絶滅に追いやった種の野生復帰の取り組みは、「見守っておればい」などの甘い考えでは成就しません。みんなでもう一步踏み出すことが求められているように思います。



コウノトリ育む農法の仕組みを聞く(1)

成田市雄氏から聞取り(編集部)

安全安心な農産物と生きものを同時に育てる「コウノトリ育む農法」。コウノトリをシンボルにして高額で取引されることも特徴です。農家にとって魅力的に思えますが、2016年で豊岡の田んぼ全体の13%と、まだ浸透しきれていないのが実態です。また、育む農法田の無農薬率は32%(115ha)で、近年高くなってきましたが過半数に届きません。無農薬がいいのは分かっているが「手間がかかりすぎる」「雑草対策が大変」「収穫量が減る」などが危惧され、実際に「3年無農薬で頑張ったが、もう限界」と減農薬に切り替えられる方もあります。

無農薬農法は、割に合わないのでしょうか。手間がかかりすぎるなら、省力化できないのでしょうか。そもそも、「コウノトリ育む農法」とはどんな仕組みになっているのでしょうか。コウノトリ野生復帰と大きく直結する重要テーマです。「浸透しきれていない」ことは、「十分伸びしろがある」ことを示しています。本紙でも寄稿してもらっている同農法の生産部会長・成田市雄さんに、これまでの成果や今後の戦略などを尋ねてみました。聞き手は佐竹です。

今回の原稿はお聞きした分の前半を掲載しました。次号に後半を掲載いたします。その後も引き続きお話を伺って行く予定です。

2016年11月9日、成田氏農業倉庫にて

佐竹:まず、成田さんがコウノトリ育む農法を進めるうえでモットーにしていることから教えてください。

成田:仲間を増やすことですね。一人でやっても地域の生態系は変わらないですから。

平成17年にコウノトリが放鳥され、18年には育む農法の生産部会がJA内にできて田んぼに旗を立ててPRしたので、村の人も(農法のことを)知るようになった。その年の稲刈りの後、近所の小学5年生の子が「おっちゃんがいくら無農薬の米を作っても、隣の田んぼで農薬を振っていたら、おっちゃんの田んぼも無農薬の米にならないんじゃないの?」と。ガーン。自分の周りでも無農薬でお米を作らないと本物にならないと考えたんです。でも、どうやって仲間を増やすのか?コウノトリのために生物多様性を向上させるとか、豊岡の子どもたちの食の安全を守るためとか、そういうことを言っても農家の人はまず耳を傾けない。だから、言葉は悪いけど育む農法で米を作ったらどれだけ収益があるかを皆さんに話したんです。その当時で、1ha耕作している人が全て慣行でやった場合と全て無農薬で作った場合では所得がどのくらい違うかを計算したら、無農薬の場合は50万円以上プラスになる。これを地域の人に話したんです。そしたら、そんなに儲かるならとみんなやり始めた。だから、平成20年に一気に7~8haまで無農薬が進み、毎年増えて3年目には10haを超えた。この集落の田んぼは全体で19haしかないの、その半分以上が無農薬になった。これは成功したと思ったんだけど、やはり草に負けて苦労が絶えない。単価は上がるけど、心配が募ると。それでどんどん減っていった。

で、今でもやめないで残っている人は、なぜ残っているかという、お金が目的じゃなかった。つまり、農薬を使わないお米作りが「当たり前」だという人。たった一人だけ。その人は高齢だけど、1.4ha全てを無農薬で作っておられる。

そのときに思ったのは、「ああ、お金で釣ったんでは、結局、お金が儲からなくなったらやめちゃうん

だな」と。その苦い経験から、今は若い人に(経済の話しをするけど)自分たちと食べてもらう消費者の健康のことを考えようと話している。工業製品じゃないんだから、健康のことを考え、農薬を使わないお米作りを「しなきゃいけない」という気持ちになってほしい。そしたら、例えば失敗して所得が減っても、よし、来年はもっと勉強して頑張ってみようとなる。お金を目的にしていると、儲からないと「やめた」になってしまう。

佐竹:でも、そこは難しいところですね。経済的に余裕がある人でないと無理なのでは。

成田:正直、僕もはじめの頃は余裕がなかったので、そういうことを言っていた。マスコミから「コウノリをどう思うか」と聞かれても、「コウノリ? それどころじゃない」と。当時は、お米を作っても1反に1万円残るかどうかだった。そんなときに、コウノリのためのお米を作れって言われても、「冗談じゃない」と思った。

佐竹:金がすべてではないけど、安定した収入があることが前提だと。

初期の頃には、無農薬に取り組んだけど1反に3~4俵しかとれなくて、結局やめられたという話を聞いたことがあります。また、無農薬農業をするには専業でやることが必要で、兼業ではとても無理との声もありました。これらの課題は、現在では技術面で相当克服されているように思います。具体的に教えてください。

今、やられていることから。秋起こし(耕耘)の時期ですね。秋に耕耘するのはなぜ?

成田:田んぼは起こさない方が、草の発生量が少ないように感じている。田んぼは起こすと土中のガスが大量に放出される。地球環境で見れば耕耘せずに作付けする方がいい。ところが、起こさないで「ふゆみず田んぼ」に入っていくと、どうしてもトトロ層の厚みが薄くなってしまう。つまりイトミミズがあまり活動しないんだな。だから両方を考えて、少しだけ一上皮を舐めるような感じで耕耘している。

佐竹:そうすればガスの放出も少なくなるわけですね。

成田:浅く起こす方がいいのは、まず、草の発生が極端に少なくなる。元々、田んぼには草の種が無尽蔵にあるので、それを深く起こせば下の種が上にあがってくる。ヒエやコナギなどの種は、地表面から下1cm 前後でないと発芽してこないのだが、深く起こすと攪乱されて上に上がり、発芽しやすい状態になる。

草を抑えるには、発芽したものを水で浮かして枯らすか、鋤き込むことだ。そこで、一度耕耘する~発芽する~水で浮かす~。耕耘が深いと下の種をまた持ち上げて来るという繰り返しになるが、耕耘が薄いと1回か2回の耕耘で始末できる。種子は長年生きているので、掘り起こせば発芽する。深い所で眠っててもらおうと。

コナギが一番困るけど、こいつは無尽蔵にいて約80%は休眠していると聞いたことがあります。1年草なのに種子は死なない。発芽するのは約20%なので、これを抑えればいい。深いと20%の絶対量が増えてしまう。だから、耕耘しないのがいいけど、起こさないとトトロ層ができない。トトロ層が深ければ、ほとんどの種子は地表下1cm 前後で発芽するが、層は水のようにやわらかく、種子が下に沈んでしまう。だからトトロ層がないと、無農薬で草を抑えることは非常に難しい。耕耘して、イトミミズに元気に活動してもらうことが大事だ。

佐竹:私はこれまで、深く鋤き込むことで通気性を良くし、酸素を入れてやるのが大事と思っていました。今の話しはそれの反対ですね。

成田:鋤きで起こせば塊になる。塊は乾きやすい。乾いた土を耕耘したら、一発で粉々になる。粉々

になった土は空気がたくさん入るので、活着がよく元気がいい。稲も草も元気になる。代かきを丁寧にしたら草は少なくなる。でも、代かきは粗い方が稲はよくできる。稲の生育がいいんだ。

佐竹:酸素が入るから？

成田:そう。代かきを丁寧にすると、人工のトロトロ層ができ種子が下に沈む。草が少なくなる。でも、酸素は入らないので、稲の生育は悪くなる。だから、田んぼを深く起こし、トロトロにすると稲は酸欠になって良くない。そして、草は元気になってしまう。それを回避するためにも、できるだけ浅く耕耘することだ。

佐竹:イトミミズでできるトロトロ層は、普通何センチくらいですか？

成田:6cm くらい。

佐竹:では、6cm までの深さで耕耘するということですね。

成田:でも、二度通るとどうしてもそれ以上深くなってしまうけどね。代かきはイトミミズがしてくれるから、しなくてもいいと考えている。

佐竹:でも、未だにほとんどの人は「秋起こしは土のため」と言って深く耕耘しているのでは・・・。

成田:昔から、米は深く起こせば起こすほどよく獲れると言われていたからね。

佐竹:秋起こし～ふゆみず田んぼは、ともかく草を抑えることが目的なんですね。

成田:そうです、それが最大の目的です。たいてい米を獲れなくするのは草なので。草を抑えるためには浅く耕耘することと多くのイトミミズが必要。米がとれないと続かない。最初は淋しい稲です。慣行栽培よりも20%は収量が減るとというのが県の見解です。

佐竹:なぜ減るんでしたっけ。

成田:草を抑えるために田植えを遅くしたり田植え後、深水にすることにより分けつが抑えられる(稲の本数が減る)ことと肥料不足(実際、施肥量を増やすと収穫量も増えた)。そして常時湛水で酸欠になるから。中干しは、土の中のガスを抜き、酸素を送るためです。土があつて水が乗っていると土中のガスは抜けない。栄養分の窒素も抜けない。水を落とすことによって、土中のガスが抜けるし、窒素も放出されやすくなる。

佐竹:豊岡では生きもののために中干し延期をしていますので、稲作(土作り)から見ると矛盾する厄介ものですか。

成田:中干し延期は、害虫を食べてくれるカエルを守るためだ。直接的には生きもののためだが、結局は稲作のためだ。

佐竹:2 週間程度の延期なら、生きものには効果があり、土にとってもマイナスにはならないということですね。

成田:オタマジャクシには悪いけど、稲のことだけを考えたら早めに水を落として土を活性化したら、稲はよくできる。だけど、あとで害虫に困ってしまう。その辺が、1年に1回しかできないのでなかなかデータはとれないけど。最初の頃は中干しを延期する時期が遅いので、おいしくないコメができると言われた。落水が遅いとガスも抜けないし窒素も放出されない。たくさんある窒素分が残ってしまう。稲ができていなくて、肥料分が多いと栄養過多になる。そうなると、米の中のタンパクが上がる。今は食味計という機械があり、タンパク値を図ったら高くなって食味計の値が下がるので、食べる前に「こ

の米はおいしくない」となってしまう。県は「原因は中干し延期だ」と。その当時は7月10日頃に落水していたが、「いや、目的はオタマジャクシを救うためのだから、オタマジャクシがカエルに変態したら落水しよう」と6月26日を“ケロケロの日”に決めて、その日に生きもの調査をして、カエルに変態していたら落水してもいいことにした。

佐竹:最初の頃は、生きものの変化を個別に見るより、カレンダーにして一斉に行うことに慣れていたんですね。

成田:分かりやすいからね。「変態を確認してから落水しよう」と言っても「なに？それ」という世界だったから。最初から各自に任すと、適当に見て「もう、オタマはおれへんおれへん」と落水してしまっていた。だから、カレンダーにして日にちを決めたんだ。

佐竹:先ほどの秋起こしに戻りますが、秋に渡ってくるカモやハクチョウは落穂や2番穂を食べますね。耕耘して下に沈めると、彼らの餌がなくなるので保護のためにはなるべく秋起こしはしない方がいいという話も聞きますが・・・。

成田:僕の耕耘は稲株がひっくり返らないよ。だから、2番穂はそのまま残る。若い人たちに「耕耘して株がひっくり返ったら、それは深い耕耘だ。株がひっくり返らない程度に浅く耕耘して」と言っている。7cm搔いたら株はひっくり返る。生産部会では秋起こしは5cmにしている。

佐竹:だから、耕耘してもカモたちは助かると。

成田:株が立つことは、別の意味でもいいことがある。ふゆみず田んぼに風が吹くと、波が立って畦の土を壊すけど、株が立っていると多少なりとも波を抑制してくれる。

(次号へ続く)



まんりょう



※マンリョウ ヤブコウジの仲間、常緑低木で秋から春

にかけて赤熟した果実となる。5月～6月頃に白い花を咲かせる。果実は白と赤がある。

我が家では、小鳥たちが運んだ種で、庭にたくさんマンリョウが自生しています。生育するのに良い条件がそろっているらしく、発芽して3年ほどで赤い実を付ける。せっかくなので植木鉢に移して育てたら、大量にできてしまい、周囲の人たちに配り処分しています。日光の当たらないところでも良く育ち、玄関先に置いても3ヶ月くらいは楽しませてくれるので大変重宝しています。毎年3月頃に突然ヒヨドリがやってきて実を全部食べてしまいます。「赤い鳥は赤い実を食べる」と言いますが、なぜヒヨドリは赤くないのでしょうか？

画・文 池上 晃



ビオトープ 1年生 ビオトープ八条 宮村 吉一



「耕作放棄地の雑草を刈ってもらえないか」 昨年の10月、それが事の発端です。

場所は豊岡市九日市上町字永長(ながおさ)、市道三坂・納屋線と JR 山陰線の線路敷に挟まれた広さ30アールの小さな三角形の土地です。



一帯は昔から優良な苗代として稲作を担ってきましたが、農業の機械化や、猪・鹿による獣害等で耕作ができなくなり永年放置されてきました。地権者14名全員が刈ることに賛成。草刈機を使いながら思いました・・・毎年同じ作業を続けるのも楽しみがないな。

そこで、水を張って抑草することにしました。幸い、豊岡市コウノトリ共生課の応援で刈り草の処分もでき今年4月末より水を入れ始めました。以後、驚きの連続です。草刈のとき動くものは全く見かけなかったのが、水を入れることで、この紙面に載せきれないほどの生き物が蘇りました。背丈以上もあるセイタカアワダチ草に覆われた寂寞の地が賑わいの場になりました。ビオトープ八条の誕生です。

8月1日コウノトリが舞い下りました。こんなに近くでコウノトリが見られる・・・多くの皆さんに感動をあたえています。喜んでいただいています。関心をもっていただいています。コミュニケーションの輪が大きく広がっています。

JR 山陰線沿いにビオトープ八条水路から延びる素掘りの農業用水路があります。100年以上の永い年月を経て、今なお現役で水を運び八条幼稚園の園児をはじめ地域の子どもの生き物にふれる貴重な場所になっています。市街化が進む中で、今ある豊かな自然を少しでも子ども達に残すことができればうれしいことです。

見学に来られた皆さんが一緒に「ここまでされるには大変な苦勞があったでしょう」と云われます。が、草刈・畦塗り・くい打ち・土運び等いずれの作業も小さい頃からしてきたことで全く苦になりません。むしろ、人生のおさらいをしているようで非常に楽しく充実した時をすごしています。

ビオトープ八条 1年生 只今勉強中です

日々の作業は宮村さんと、お近くの西垣さんのお二人でなさっています。





豊岡市日高町伊府地区でコウノリの餌場づくりをしました
コウノリ湿地ネット会員 森 薫



11月26日(土曜日)の午後、市内日高町伊府地区でコウノリの餌場づくりに励んでおられる『ひろちゃんクラブ』の元に、兵庫県損害保険代理業協会、コウノリKIDS、兵庫県・環境課、市コウノリ共生課の皆さん、そして当会がかけつけ、総勢40名で湿地作業をしました。

今回は家族で参加される方も多く、常連の人も子どもたちやママの頑張りに目を見張りました。『ひろちゃんクラブ』の皆さんは、作業がしやすいようにと前日に木を伐って、木道を作ってくださいましたので、段取りよく橋を架けたり、池を掘ったり、水路を繋げていくことができました。

作業の後には、『ひろちゃんクラブ』の方が地元の田んぼでつくられた新米が、じゃんけん大会の勝利者へプレゼントされました。参加者全員がそれぞれにお礼の言葉を交わし、労って散会となりました。

これから冬のあいだ、湧水が豊富なこの湿地はコウノリの絶好の餌場とねぐらになります。コウノリが舞い降りている姿を絵に描き感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今回で2回目となるこの作業は、日本損害保険代理業協会のグリーン基金、兵庫県損害保険代理業協会の支援金、兵庫県による助成金を受けており、スコップなどの道具やウエイダーなどを購入させていただきました。





ハチゴロウの戸島湿地便り(11月～12月編)
戸島湿地管理棟 森 薫



■戸島ペアは

繁殖期前でありながら11、12月もマウンティングを重ね、巣塔や淡水域で仲良く寄り添っています。来春もかわいいヒナが誕生することを願っています。2017年は酉年。ヒナが生まれると、戸島ペア繁殖10周年の記念年となります。無事巣立ってくれると、子どもたちも累計20羽の大台に乗ります。お祝いに、何か心を寄せ合える集いを計画したいなど、湿地で寄り添うペアを見ながら考えています。



左:11月、よりそう戸島ペア
右:12月、交尾する戸島ペア



■湿地には

クラーク記念国際高等学校豊岡キャンパス、株式会社川嶋建設、トヨタ部品兵庫共販株式会社、近畿大学附属豊岡中学校の皆さんなど、総勢120名の方々が湿地作業に来てくださいました。草刈り・搬出作業や外来種駆除などをしていただき、今回初めての試みとして、刈った草を、市内の畑で堆肥として活用していただくことができました。

また、宮村さんが湿地での作業がしやすいように重機でう回路をつくったので、軽トラで走行できるようになり作業効率が格段に上がりました。熱意で作業されているので、様々な工夫が生まれています。



トヨタ部品兵庫共販(株)



上:クラーク記念国際高校
下:う回路造成作業中



(株)川嶋建設

■管理棟には

市内田鶴野、八条、港東小学校3年生の子どもたちにコウノリのことを「教える」というより、一緒に楽しく学び合いました。

田鶴野小の子どもたちは保護増殖センターが校区内にあるので、日常的にコウノリを見て育っているためか、やりとりは打てば響くのごとくで、気持ちの良いひとときでした。八条小では、校区内につくられたビオトープ水田にコウノリが度々飛来していて、「コウノリはイケメンだ」と新鮮な感想が聞けました。また、港東小は戸島ペアがよく行く採餌場所で、10名の子供たちとアットホームな雰囲気でお話が出来ました。

実物のコウノリを見ながら学習ができる環境なので、2017年度もたくさんの小学校から来ていただきたいと思っています。



左から、田鶴野、八条、港東の各小学校3年生のみなさん

■城崎大橋架替え工事の影響確認のためコウノリのモニタリングが始まります。

円山川に架かる城崎大橋の架け替え事業が、平成35年完成予定で本格的に始まります。事業主体の兵庫県土木事業所は、工事の実施がコウノリの繁殖に与える影響について調査するために、戸島湿地内と近接地点でのモニタリングを1月から始められることになりました。県の担当者から工事の内容と工程の説明を丁寧にしていただきましたので、私たちもできる限り協力させていただきたいと思っています。

同じく今春からは、下鶴井地区の運動公園の整備工事も始まります。ここでは、田んぼ2枚隔てた所で赤石ペアの巣塔があります。城崎大橋の工事以上の不安要素があるように思いますが・・・赤石ペアへのモニタリングはされないのでしょうか。

いずれにしても、円山川右岸のコウノリ3ペア(戸島・赤石・野上)は、今までと違う環境の中で繁殖期(子育て)を迎えることとなります。

高病原性鳥インフルエンザについて

兵庫県立コウノトリの郷公園 獣医師 松本令以

今年 11 月以降、国内各地の家禽、野鳥、野鳥の糞便、動物園の飼育鳥などから高病原性鳥インフルエンザウイルスの検出が相次いでいます。野鳥では、ハクチョウ類、ガンカモ類、ツル類、猛禽類などから H5N6 亜型の高病原性鳥インフルエンザウイルスが検出されています。兵庫県立コウノトリの郷公園では、12 月に対策マニュアルを改訂し、高病原性鳥インフルエンザが飼育コウノトリで発生しないよう、対策を取っています。

高病原性鳥インフルエンザは、感染した鳥と濃厚に接触するような特殊な場合以外では、人に感染することはありません。したがって、双眼鏡で野鳥を観察するなどの行為では、高病原性鳥インフルエンザを心配する必要はありません。

長靴を履いて湿地内に入って観察をしたり調査をしたりするような場合でも、人にウイルスが感染することはほとんど考えられません。しかし、長靴等にウイルスを含んだ糞便等が付着し、自分自身がウイルスの運搬者となり、ウイルスを拡散してしまう可能性は考えられます。長靴についた泥などはこまめに落とし、観察や調査の後にはきれいに洗って、できれば市販の消毒薬（塩素剤、逆性石鹼、アルコールなど）を吹きかけるなどして消毒しておくことより安心です。

野鳥の死体や異常を発見した場合には、環境省が定めたマニュアルにそって検査等の対応がなされることになっていますので、市町村の鳥獣保護担当にご相談ください。



編集後記



私の『コウノトリ野生復帰』のイメージは、加藤登紀子さんが歌う『Revolution』

♪ 生きてることは 愛することだと ほんとはわかっているのに
 自由なはずの 誰もかれもが がんじがらめのとらわれ人なのか
 Le Revolution ながされずに 愛するものを抱きしめるために
 Le Revolution 夢ではなく 今たしかに心に決めた Le Revolution』♪

2017 年、しっかり生きたいと思う。 (森)

今年は雪が降らなくて、小鳥たちもきつとほっとしているだろう。もちろん、コウノトリが心配な私たちも。でも、相変わらず我が家の狭い庭に毎日小鳥がやってくる。ジョウビタキ、ヒヨドリ、あとは??? もちろんネコたちは庭に出しません。

(宮村)